

琉球病院 Monthly



独立行政法人
国立病院機構 琉球病院
National Hospital Organization RYUKYU Hospital

Vol.77
2019. May

発行者 琉球病院事務部長
秋好 輝雪

基本理念 この病院で最も大切なひとは医療を受ける人である

「第31回九州アルコール関連問題学会沖縄大会」を終えて

ディケア担当訪問看護併任看護師長 嘉手苺 美智留

去る3月22日、23日に「第31回九州アルコール関連問題学会沖縄大会」が、沖縄国際大学にて開催されました。

学会テーマを「連携再考 - アルコール健康障害対策推進計画策定後の連携を考える」として、特別講演や分科会、ポスターセッション、一般市民講座など6つのプログラムのもと行われました。

特別講演は「アディクション医療のこれまでとこれから」をテーマに、元琉球病院院長の村上優先生に講演を頂き、アルコール関連問題の振り返りと今後の可能性について、新たな知見と話題提供を頂きました。

分科会では、アルコール依存症にとって内科や救急外来、消防署を含む関連機関との連携が重要であることの話や、アルコール依存症の看護、家族支援のCRAFTの紹介などがあり好評でした。また自助グループの利用者自らの話は、アルコールは本人の問題に限らず、家族や社会生活など多くの問題に関連することを訴え、改めて各関連機関との「連携」の重要性について再認識することができました。一般市民講座では、沖縄県警察本部を含む7名のシンポジストにお話を頂き、2日間の限られた時間ではありましたが、質疑応答など活発な意見交換が行われ有意義な時間となりました。

沖縄でのアルコール関連問題学会開催は9年ぶりであり、主催である琉球病院は昨年準備を進めてきました。

共催の糸満清明病院の協力、会場を提供して頂いた沖縄国際大学、講演やシンポジストを快く引き受けて下さった各先生方に心より感謝申し上げます。また、学会の運営スタッフである病院職員、学生ボランティアなど、多くの皆様のおかげで盛況のうちに学会を無事終えることが出来ました。

学会初日に行われた親睦会も沖縄ダルクによるエイサーで大いに盛り上がり、病院間、地域、行政などの関係機関の皆様と、親睦と連携を深める機会となりました。

改めて多くの方々とのつながり、ご理解とご協力があったからこそ大会成功であったと思ひ、心より感謝申し上げます。

トピックス

行事・出来ごと

- 病棟等建替 進捗状況 本体工事：新病棟（第1期工事）完成・・・平成27年7月
- 整備の動き 雨水配水管盛替工事 完成・・・平成29年2月
- 新病棟（第2期工事）完成・・・平成30年10月

教育・研修

- CVPPP(包括的暴力防止プログラム)院内フォローアップ研修

日時： 2019年5月13日（月）9：00～17：15

● 地域医療連携室だより

当院には治療抵抗性統合失調症に唯一の適応をもつ抗精神病薬クロザピンの専門治療病棟があり、現在40名以上の方が地域での生活を目指して治療を行っております。県内各精神科病院から紹介頂き、治療を終えた後は地域で近くの病院へ通えるように連携を行っております。クロザピン治療について興味がある方、クロザピン治療をご希望の方はお気軽に地域医療連携室までお問合せ下さい。

院長

福治康秀(ふくじ やすひで)
1964年生まれ、那覇市出身、首里高校卒。

1993年琉球大学医学部卒、琉球大学医学部精神神経科入局。95年那覇市立病院精神科、96年琉球大学精神神経科、2009年琉球病院精神科部長、2010年副院長を経て2014年琉球病院長に就任。日本病院・地域精神医学会理事。



診療科

- 一般精神科
- こども心療科
- 物忘れ外来
- アルコール依存症等外来

病床数 416床

- 精神科病棟 151床
- 認知症 56床
- アルコール 54床
- 児童思春期 ユニット 4床
- 重症心身障がい 90床
- 医療観察法 37床



● アクセス
路線バス/那覇BS(下り)または名護BS(上り)より沖縄バス「77番名護東線」浜田バス下車徒歩3分
自動車/那覇市から40分
沖縄自動車道金武インターから名護向け5分

NHO PRESS～国立病院機構通信～について

琉球病院は、国立病院機構(NHO: National Hospital Organization)という143の病院からなる国内最大級の病院ネットワークの病院です。

国立病院機構(NHO)という病院ネットワークが、どのようなグループでどのような活動をしているのかを紹介する「NHO PRESS～国立病院機構通信～」を発行しています。外来ロビーに設置していますので、ぜひご覧になってください。

なお、ホームページに最新号と過去のものを掲載していますので、そちらもぜひご覧になってください。[NHO PRESS]で検索してください。

お問い合わせ時間
8:30～17:15 (土・日・祝日以外)
TEL: 098-968-2133 (代)
内線: 231・234
地域医療連携室(直通)
TEL: 098-968-3550
FAX: 098-968-7370

治療抵抗性精神疾患への医療



クロザピンの治療状況

平成22年から治療抵抗性統合失調症の患者様に対してクロザピン (CLZ) 治療を開始し、全症例は263例になりました。平成31年2月のCLZ導入は3例で、このうち2例は他の病院からのご紹介をいただきました患者様でした。(入院中1例、通院中1例) CLZ治療前には暴力行為や多飲水などの問題行動のために隔離が必要な患者様も多くいらっしゃいましたが、CLZ継続例では問題行動も少なくなり、隔離は解除できています。週に3回の専門外来も行っていますので、患者様のご紹介をお願いいたします。

m-ECT (修正型電気けいれん療法) の治療状況

当院では、m-ECT (修正型電気けいれん療法) による治療を行っております。平成31年2月の治療実績はありませんでした。

こども心療科

昨年度、子ども心療科を新規で受診された患者様は384名でした。受診希望者は増加の一途を辿り、受診までの待機期間は慢性的に長期化しています。気になった時、相談したいと思った時にすぐに診察対応できない状況にあることに、心苦しく思っております。今年も、昨年よりも子ども心療科を担当する医師が少なくなってしまうため、業務の効率化を図ることで、待機期間への影響を最小限にとどめられるよう工夫を重ねているところです。ケースの緊急度によっては、早めの受診をご案内する場合がございます。受診については、まずはお電話でご相談ください。

認知症医療 <認知症の方に対するコミュニケーション技法について>

認知症高齢者の方が、症状が悪化し入院となった場合に、生活環境が変わったことや入院の理由が理解できないために混乱することがあります。入浴や排泄の時の介護抵抗が出現したり、治療を拒否することも少なくありません。そこで私たちは、物忘れや失敗を頭ごなしに否定したり、教え込もうと説得をしないこと(自尊心を傷つけない)、相手の主張を受け入れる態度で接することを心がけ、日々のケアにあたっています。最近では、「ユマニチュード」という新しいコミュニケーション技法が注目されています。これは、見る、話しかける、触れる、立つという4つの方法が柱となっており、例を挙げると「目の高さを同じにする」「優しく背中をさすったり歩く時にそっと手を添える」など認知症高齢者が安心するような接し方で、全部で150以上の技術があります。 私どもの病棟では4月から転勤や病棟配置換えに伴い、新たなメンバーでの出発となります。学習会等を開催し、知識・技術習得機会を設けることで、更なる専門性の高い看護を継続して提供できるよう取り組んでいます。

重症心身障がい医療

療育指導室では利用者の皆様へ様々な日中活動の提供を行います。活動の形態としては集団活動、グループ活動、個別活動、各種季節の行事、院外活動等に分けられ、利用者さんの状態によって活動形態は考慮されます。昨年度、療育指導室では主任保育士を中心に利用者の年齢や状態に応じた適切な支援に向けて取り組みました。生活年齢を考慮した壁面装飾、多様な感覚刺激の提供、視覚提示によるワーキングシステム等、より個性性を尊重した活動に取り組んでいます。利用者の皆さんに楽しみと思ってくれる時間がつくれるように、笑いが一つでも増える為に、次年度も取り組んでまいります。よろしくごお願い致します。

アルコール・薬物依存医療

平成25年5月27日、アルコール依存症の新しい治療薬「レグテクト」が発売となりました。レグテクトは、アルコール依存症の方の強い『飲酒欲求』を直接和らげてくれる作用があります。当院では31年2月末現在、外来通院の患者様95名、入院中の患者様11名の方が服用されています。内服している方は「飲酒欲求が軽減した」と話され、再飲酒の抑制につながっています。また、当院の外来での調査では、レグテクト内服を継続している患者様の方が、治療継続率が高いという結果も出ております。患者様へは、適宜導入を勧めています。断酒が困難な方は、ぜひ外来を受診し相談して下さい。

包括的地域精神医療

4月になり、訪問看護師長とスタッフの配置換えがあり、病棟から訪問看護へ、訪問から病棟へ移動になったスタッフもあり、慣れない環境の中、スタッフ一同奮闘しております。当院の訪問看護を受けておられる利用者様も、新しいスタッフとの関係構築ができるまでには少し時間もかかり、ストレスを感じやすい時期かも知れません。訪問看護と外来、病棟、デイケアが一体化し、情報を共有しながら地域での生活を支えていく流れが強化されてきています。地域での生活がより安定し、充実した日々となるようしっかり支えていけるよう努めていきたいと思っております。

臨床研究部活動状況 平成30年度の臨床研究実績報告

平成30年度の当院の臨床研究実績についてご報告いたします。論文数は10本(前年度8本)、学会発表は28演題(前年度27演題)でした。論文数、学会発表数ともに若干増えました。臨床研究においては、厚生労働科学研究で「重度かつ慢性の精神障害者に対する包括的支援に関する政策研究(研究代表者:木田直也)」「通院医療の実態を把握するための体制構築に関する研究(大鶴分担班 研究代表者:平林直次)」の研究が進みました。新年度も臨床に還元されるような臨床研究に臨んでいきたいと思っております。

